
僕の素晴らしい一日

よっちゃんさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の素晴らしい一日

【Nコード】

N9175B

【作者名】

よっちゃんさん

【あらすじ】

ごく普通の高校生。彼女もいないから、もちろんエッチもしたことがない。そんな僕がこんなに素晴らしい一日を体験することになるうとは。

僕はごく平凡な高校生だ。特にめだったこともなく、もちろん彼女もない。

そんな僕に夢のような日がやってこようとは。

今日も遅刻しそうで僕は家を飛び出した。今日も夢のなかで楽しすぎたから寝過ぎたんだ。

「夢のなかじゃなきゃあんなことできねえよな（笑）」そんなことをいいながら家を飛び出すと、
「キヤツ。」

家の前の交差点で女子高生にぶつかってしまった。「なにをするのよ！！」怒ってる。僕は女の子の上のしかかっていた。もちろん、不用意にだ。しかし、

「ちよつと、あなた本気！？」

そう、僕のおそこは朝起きたときから朝立したままだったのだ。僕はあまりにはずかしくなり、

「すみませんっ！！それじゃあいそいでるので！！」

すばやくその場から逃げようとした。すると、

「別にいいわよ。」

え???

僕は耳を疑ったがすばやく相手の顔から胸からおしりまで観察して

いた。顔は目がくりつとしてるが、髪は茶髪でいかにも

「エッチ」であつた。パンツが見えてる。

「朝から元気がいいのね。結構タイプよ。そこもオツキイしね（笑）」

「

ツンツンした顔がハニカンだ。僕は不覚にもムラツとした。

「なにを言ってるんですか！？いまから学校だし、意味わからねえだろ！！」

理性で本能に勝ちたいけど僕のあそこはさらに固くなっている。

「大丈夫だよ。」といきなりふところに入ってきて僕の顔を見あげてくる。くりつとした目で。

おっぱいの感触がつたわった。おもわず抱き締めた。彼女は僕のズボンからとりだし、コキコキしはじめた。

僕は本能を開放した。

「かわいいなあ。おっぱい揉んでいいよね？」

「はあはあ、キスしてほしいの。揉みながらキスして。」

おっぱいを出したいけど、初めての僕には制服のはずしかたがわからなかった。

とりあえず押し倒した。広場に押し倒した。誰に見られてもかまわないや。

「はあはあ、おっぱいをだしてくれ。」

「いいわよ。はやくもんで！！」一瞬にしてきれいなピンクの乳首が見えた。すぐに揉みだした。

「はあはあきもちい。ねえ、きもちい??」

「う、うん　おまえ名前は？」

「ゆりこよ、ああっ！あん！！」

僕は固くそそりたったあそこを彼女にさしこんでいた。

「はあはあ、痛いっ！！う　うあ！！いやーん！！！！」

「ゆりこっ！！はあはあ　ゆりこおお！」

腰をふる。かつてない快感が身体中を走る。彼女の声がとても子供っぽくてかわいい。

「ああーん！きもちいっ！うああああ！！あっあっ！！」

「ゆりこー！！うううあ！！」

彼女のなかにだしてしまった。とてもさわやかだった。彼女を抱き締めると、すごく満足そうに、

「うふっ。上手いねっ！！大好きだよ！！」

僕は電話番号をこうかんし、学校へ向かった。学校につくとすでに四時間目。担任のももこ先生は

「いつも、遅刻なんてしないあなたがなぜ？？あとで保険室にきなさい。」

なぜ保険室？と思ったが、

「はい。」とだけいって昼休みにはいった。

昼休みはいつもより弁当がおいしかった。すばやく弁当を食べると保険室に向かった。

トントン

「失礼します。」

入るとももこ先生が椅子に座っていた。

ももこ先生は鼻筋のきれいにとおったいわゆる美人である。今日もわざと胸を強調するような水色のセーターをきていた。

「ここに座つて。」

ももこ先生のすぐ前には椅子がおいてある。すぐに座ると胸の大きさに驚いた。

「あなた　今日はなんで遅れたの？」

「僕　その。。。。」

あまりのおっぱいの大きさに言い訳がでてこない。

「わからないけど、あなたは悪いことをしたの。あなたには先生のゆうことをきいてもらいます。」

先生が僕を抱き締めてきた。おっぱいに顔がうもれる。

「じゃあまずはがまんしてもらうつわね（笑）手をださないでね。」

先生はいきなり目の前で服を脱ぎはじめた。黒いブラジャーにおっぱいが詰まっているようだ。ムラムラしてきた。

「先生ね、前からあなたが好きだったのよ。かわいい顔して。おかしてやりたかったの」

先生は目の前で下着姿になった。その上に保険室にあつた白衣をきて、中のブラジャーをはずした。おっぱいの形がきれいに浮き上がっている。見えそうで見えない。ムラムラがおさまらず、
「揉んでいいですか？」ときいたが

「だめよお。あなたのたえてる顔をみたいの。動いたら負けよ!」
 と言いつつ、僕の目の前でおっぱいを揉みながら、
 「あつ。あつ、ああ〜ん」とあえぎ挑発してくる。

「ほらしゃつぶって」目の前におっぱいが現れた。しゃつぶってみるよ、

「ああん。きもちいい。ああっ」
とあえいんでいる。僕は襲いたくてたまらない。我慢の限界にきている。

「今度はぱいずりしてあげるねっ」と言い、先生は僕のそれを、大
きなおっぱいではさんできた。

上目ずかいのかわいい顔に我慢できなくなり僕はいつてしまった。「ウフフ。かわいいわねえこれくらいでもらしちゃって。さあ、好きにして。」

先生はベットによこになった。すぐに上に乗り、挿入する。

「ももこ先生っ！ーうああ！！」とてもすばやく腰をふつた。快感だ。

「ああっ あっ いやー!! ううっ はあ はあ ちんちん おっきいっ!! ああ ああっ!!!!!!!!!!」

先生の割れ目から液体がながれている。僕と先生、それぞれのいやらしい汁だ。

僕は上機嫌で保険室を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9175b/>

僕の素晴らしい一日

2010年11月18日14時22分発行